

『赤い武功章』におけるヘンリー・フレミングの人的成長 —原作と映画の比較分析—

Henry Fleming's Development as a Man in *The Red Badge of Courage*:
Comparative Analysis of the Original Novel and the Movie

古 賀 元 章

山 本 一 夫

Motoaki KOGA

Kazuo YAMAMOTO

英語教育講座

北九州工業高専

(平成20年9月30日受理)

はじめに

スティーヴン・クレイン (Stephen Crane) の『赤い武功章』(*The Red Badge of Courage*, 1895) は、出版されるや否やアメリカ国内でベストセラーとなり、翌年にはイギリスでも好意的に迎えられた。この小説は、無名であったクレインを一躍有名にさせた彼の代表作である。

題材となっているのはアメリカの南北戦争である。そこで、両軍の兵士たちの戦闘行為の描写に注目すると、戦争の空しさを指摘することができよう (Wyndham 181)。しかし、『赤い武功章』の大半の描写は、兵士たちの詳細な戦争行為そのものよりも、戦場で恐怖と戦う北軍兵士の主人公ヘンリー・フレミング (Henry Fleming) の激しく揺れ動く内面葛藤に焦点を当てている。入隊した後の彼は、臆病な兵士から次第に勇氣ある兵士へと変わっていく。そこには、人間として成長する彼の姿を認めることができよう。原作の鑑賞では、この人的成長の過程を考察する。

『赤い武功章』は、1951年に名匠ジョン・ヒューストン (John Huston) 監督によって映画化された。この時期の彼は、『黄金』(*The Treasure of the Sierra Madre*, 1948)、『アフリカの女王』(*The African Queen*, 1949) といった名作でアカデミー監督賞や同作品賞を受賞しており、40歳代の監督として脂の乗り切った頃であったと言える。クレインの小説の映画は、上映時間69分という小品の部類であるが、第二次世界大戦へ出征した経験を持つ俳優のオーディ・マーフィ (Audie Murphy) を主役に起用して、原作が伝える戦争の緊迫感とスピード感を全面的に出し、観客を最後まで飽きさせることなく感動へと導く完成度の高い傑作となっている。

この映画は次のようなナレーションからはじまる。

この物語は戦いを恐れたある青年が勇氣ある大人へと成長する姿を描いている。それは南北戦争に出征した多くの戦いを恐れた青年が自由で強い国民となる物語でもある。¹

ここには、ヒューストン監督の映画製作の意図が明確に表現されている。それは、原作と同じように、英雄的な兵士へと成長する主人公の青年 (フレミング) を描くことである。映画の鑑賞では、監督のこの製作意図を参考にし、フレミングの人間としての成長過程をどのように評価すべきであるかに注目する。

最後に、原作と映画のそれぞれに見られるフレミングの人的成長を比較分析して、そこから何が明らかになるのかを論述したい。

1. 原作の鑑賞

1.1 最初の交戦とその前後

『赤い武功章』を出版して1年後、クレインは『退役軍人』（“The Veteran,” 1896）を発表する。この短編では、年老いたフレミングが孫に、若き日に初めて参加した南北戦争について述懐する。それは、この最初の戦争が恐ろしくて逃げ出したことであった（177）。² では、彼の恐怖と逃亡がどのようなものだったのであろうか。それらの点について検討してみよう。

この小説の冒頭では、のっぽの兵隊のジム・コンクリン（Jim Conklin）と、どら声の兵隊のウィルソン（Wilson）が部隊の移動の有無について言い争っている。この部隊に属するヘンリーは、この議論に加わずに、彼らの言葉や仲間たちの意見をそばで聞いているだけである。彼が実感するのは、母親の反対を押し切って志願したことの後ろめたさや、本で読んだ華やかな戦争記事（行軍、包囲、衝突）とは正反対のけだるい現実である。彼は、戦場から逃げないことが重大な問題であると考えようになり、臆病風に吹かれはじめるのである。そこで、彼がジムに“Did you ever think you might run yourself, Jim?”（13）と尋ねる。相手から、“... and if a whole lot of boys started and run, why, I s’pose I’d start and run. And if I once started to run, I’d run like the devil, and no mistake. But if everybody was a-standing and a-fighting, why, I’d stand and fight.”（13）という言葉が返ってくる。仲間が戦場から逃げることもあると知って、彼は幾分か安心する。

翌日になると、ヘンリーは兵士たちについて二つの考えを抱くようになる。一つは、彼らを英雄だと見なして恐れることである。もう一つは、彼らも心の中で迷っているのだと思い込むことである。恐怖のあまり彼は、押し寄せる敵兵たちの目が龍の眼球のように大きくなることを想像したり、自軍の進行をムカデのような怪獣の進行にたとえたりする。彼が野営のテントに戻って眠りにつくと、脳裏に去来するのは、多くの舌を持つ恐怖心がべちゃくちゃ喋って、自分を逃亡させようとする幻影である。

敵軍の姿が現れはじめると、ヘンリーはいよいよ戦闘の到来を覚悟すると同時に、連隊から逃れられないことを知った。この頃になると、入隊前の彼の功名心は無くなっていた。旅団は、小さな森の近くで止まり、兵士たちは身をかがめて敵軍のいる野原の方へ不安げに銃を向けた。ついに敵の大群が大きな声を上げながら突進して来た。ヘンリーは、やみくもに銃を発射させた。あちこちで味方の兵士たちが倒れていった。小康状態の後、敵軍が再び押し寄せて来た。それは、彼にとって、龍の群れのように感じられる恐れであった。彼の周りの兵士たちは、見栄も外聞もなく逃げ出した。彼も恐怖のあまり声を上げながら、向きを変えて一目散に走った。途中で彼は、逃亡は味方の軍隊の全滅が近づいたのだと自分に言い聞かせたり、負傷兵を羨ましく思い、“a wound, a red badge of courage”（46）が欲しくなったりした。

前線の様子を知るために、ヘンリーは一人の兵士に“Why—why—”（59）と問いかけた。兵士は、“Let go me! Let go me!”（59）と激しい口調で怒り、持っていた小銃を振り回した。ヘンリーは小銃が頭に当たり気絶してしまうと、兵士はその場を走り去った。

正気を取り戻したヘンリーは頭に負った傷のことを考えながら歩いていたとき、別の兵士が焚き火の方へ行くように教えた。彼はその場所で、味方の陣地にいる仲間のウィルソンと再会し、傷の手当てをしてもらった。先の交戦前のウィルソンは彼に、死を覚悟した言葉を述べたり、家族宛の手紙を入れた袋を渡したりしていた（26）。しかし、ウィルソンは戦闘で死なずに彼の目の前にいた。仲間のこの弱みに気づいて、ヘンリーは彼に対して密かに優越感を抱き、失いかけていた自信を取り戻した。そこには、修羅場をくぐり抜けて、幾分か人間的に成長した彼の姿が認められるであろう。その成長の一因が、皮肉にも名も知らぬ兵士から受けた頭の傷であった。その傷が、彼にとって戦争での武勇の証しとなったのである。

1.2 2回目の交戦

ヘンリーは敵軍と2回目の交戦を迎えると、必死で戦い抜く決意であった。今の彼は、以前と違って周辺を見る余裕があり、落ち着いて目標に狙いをさだめて引き金を引いたり、また夢中になって進み敵の軍旗をウィルソンと奪い合って手に入れたりした。

翌日の戦闘で、ヘンリーは足をふんばり味方の軍旗を両手でしっかりと支えた。自軍の猛烈な銃撃の結果、敵軍の攻撃が次第に弱くなった。そのとき、味方の兵士が連隊長とヘンリーの部隊の少尉との会話を知らせ

にやって来た。その場面の一端が次のように書かれている。

‘by th’ way, who was that lad what carried th’ flag?’ he [the colonel] ses. There, Flemin’, what d’ yeh think ‘a that? ‘Who was th’ lad what carried th’ flag?’ he ses, an’ th’ lieutenant, he speaks up right away: ‘That’s Flemin’, an’ he’s a jimhickey,’ he ses, right away. What? I say he did. ‘A jimhickey,’ he ses — those ‘r his words. He did, too. I say he did.... Th’ lieutenant, he ses: ‘He’s a jimhickey,’ an’ th’ colonel, he ses: ‘Ahem! ahem! he is, indeed, a very good man t’ have, ahem! He kep’ th’ flag ‘way t’ th’ front. I saw ‘im. He’s a good un,’ ses th’ colonel. ‘You bet,’ ses th’ lieutenant, ‘he an’ a feller named Wilson was at th’ head ‘a th’ charge, an’ howlin’ like Indians all th’ time,’ he ses. (98)

この会話の内容が示すように、ヘンリーとウィルソンの戦場での武勇が、味方の軍隊の間で広く知れわたるようになっている。この武勇の話聞いて、二人は嬉しくなったり、連隊長と少尉に対する感謝を抱いたりする。彼らには心の安らぎが見られる。ここでヘンリーの武勇と心理描写から読み取れるのは、自軍から英雄的な働きを称賛されることが自信の確立へとつながっていることである。それは、彼の精神的な成長の表れであると言える。

そうした精神的な成長が、後のヘンリーの戦闘行為において発揮されることになる。彼は、森の中から敵軍が現れても、味方の兵士たちが命を落とそうとも、冷静さを失わずに鮮やかな色の軍旗を持って先頭に立ち、金切り声を上げて自軍を叱咤激励する。彼は、暴れ馬のように突進し、敵の旗手が敗者の絶望の表情を浮かべて倒れるのを見届ける。2度目の交戦は北軍の勝利で終わる。今回の彼の戦いぶりは、最初の交戦の場合と違って、ひるむことなく敵軍への前進のみの英雄的な行為である。彼は、今何をしなければならないかをはっきりと自覚し、人的に成長を遂げていると言える。

戦いが終わって、“scenes where many of his usual machines of reflection had been idle, from where he had proceeded sheeplike” (107) から抜け出すと、ヘンリーはこれまでの自分の行為の成功や失敗を整理しはじめる。彼の頭の中では、戦友たちに目撃された英雄的な行為の記憶が輝いて紫色と金色の列をなし、さまざまな光を屈折させて行進する。ところが、そこには、戦場で脱走した自らの亡霊が現れる。次第に彼は力を奮い起こして、その亡霊につきまとう脱走の罪意識を取り除くのである。それができたのは、2回目の交戦後にさらに人間として成長したからである。その成長が次のような描写から読み取ることができよう。

He [Henry] found that he could look back upon the brass and bombast of his earlier gospels and see them truly. He was gleeful when he discovered that he now despised them.

With this conviction came a store of assurance. He felt a quiet manhood, nonassertive but of sturdy and strong blood. He knew that he would no more quail before his guides wherever they should point. He had been to touch the great death, and found that, after all, it was but the great death. He was a man. (109)

彼は、以前の自分の信条（厚かましき、大言壮語）を反省することができて嬉しく思うようになっている。このことを確信する彼の体内に、成長の自覚が浸透していくのである。そこで、最後の文（“He was a man.”）が、兵士としてばかりではなく、人間としても一層成長を遂げた彼の姿をはっきりとわれわれに印象づけるであろう。

1.3 物語のエンディング

南北戦争は北軍の勝利で終わった。この小説の物語のエンディングを描く次のような文章を見てみよう。

He [Henry] had rid himself of the red sickness of battle. The sultry nightmare was in the past. He had been an animal blistered and sweating in the heat and pain of war. He turned

now with a lover's thirst to images of tranquil skies, fresh meadows, cool brooks — an existence of soft and eternal peace.

Over the river a golden ray of sun came through the hosts of leaden rain clouds. (109)

雨が降り出し、疲れた北軍の兵士たちはぬかるんだ道をぶつぶつと文句を言いながら退却する。その行軍の中にいるヘンリーの心は、他の兵士たちの場合と違い、晴れわたり平安である。彼が南軍との2回目の交戦後に自らの体験を振り返ったとき、頭の中で英雄的な行為の記憶が紫色と金色の列をなして行進していた。上の引用文の最後の一文が意味するのは、実際の風景（雨雲の中から射す一筋の金色の日光）が、このような行進のイメージを具象化し、穏やかな彼の心象風景にもなっていることであろう。この文章は、彼が、いっどんなことが身に降りかかっても、それを乗り越えようとして、少しずつであるが成長していくことを暗示しているように思われる。

ヘンリーの勇姿が敵前逃亡の隠蔽に基づくことを拠り所にして、彼の成長は偽善的であるという見方がある（『スティーヴン・クレイン』104;『スティーヴン・クレインの印象主義的技法』140-42）。しかし、このような見方は早計であろう。クレインの創作の姿勢は、これまでの本稿の論考からわかるように、一兵士の揺れ動くさまざまな心理の動きをありのままに伝えようとするものである。ヘンリーのウソ（突発的な頭の負傷を戦場での負傷にすること）についても、同じくクレインの創作の姿勢を反映していると言えよう。したがって、人間の成長の要因は、きれい事ばかりではない現実をわれわれに教えてくれているのである。

2. 映画の鑑賞

2.1 最初の交戦とその前後

映画では、ヘンリーの所属する北軍の連隊は、南軍との戦闘がいつはじまるか予測できない中で待機させられ、無限に続くかと思われる日々の演習に明け暮れている。彼は実戦経験がまったく無いので精神的な不安や孤独に常に直面し、同じ悩みを共有できる友を見つけようとしてもなかなか見つからない疎外感に襲われる。このような彼の心理を的確に表現しているのが、故郷の父親に手紙を書きながら涙ぐんだり、戦場で「逃げる」さまを連想したりする場面であり、また、逆に恐怖の裏返しから「早く戦いたい」と仲間が強がりの言葉を吐いたり、行軍の途中どころがっている兵士たちの死体を目撃して怯える場面である。

南軍との最初の交戦シーンははじまると、進軍ラッパの音は高らかに鳴り、砲弾は至る所で炸裂する。喚声を上げて近づいて来る敵兵に向かって銃を構える緊張した兵士たちがいる。激しい銃撃戦の中、銃弾を受け突然倒れる兵士たちがいる。銃を放り投げ逃走しようとする兵士たちを捕まえ元の場所に連れ戻そうとする中尉がいる。最初の交戦で敵軍が退却し、つかの間の心の安らぎを覚える兵士たちの本心が示される。「ついに終わった。最大の試練は過ぎ去った。戦争の恐怖に打ち勝ったのだ。彼[ヘンリー]は誇らしかった。無理だと思った理想の人間になれた気分だった」と、ナレーションが交戦後の主人公の心境を語っている。交戦はリアルに描かれているので、観客は登場人物たちの一挙手一投足に魅了されるのである。

ところが、映画は戦況の急激な変化を与える。北軍は、敵軍の予想外の反転攻勢によって窮地に陥る。防戦一方の兵士たちは、武器を捨てて次々と逃げ出す。「戻れ、戻れ、脱走兵は銃殺だぞ!」という中尉の叫びを無視して、ヘンリーも砲弾の嵐の中を逃げ惑い、森の中へと迷い込む。実際には、味方軍が敵を撃破したことが判明する。なぜなら、馬に乗った連隊長たちの会話を、ヘンリーは草むらから偶然耳にするからである。「若者は罪人のように萎縮した。彼の連隊は勝ったのだ。愚直な戦友は踏みとどまり、無知ゆえに勝利を得た。裏切られた気分だ。戻ったら何と言われるのか?きっと嘲笑の渦だ」と、ナレーションはヘンリーの苦しみを説明している。その後彼は、撤退する負傷兵たちの行列に出くわし、正当な理由で戦場から退却しようとしている彼らを妬ましく感じる。ヘンリーはまた、その行列の中に戦友ジムを見つける。ジムはすでに何度も戦闘を経験した兵士であるが、戦闘前の長い待機するとき、戦場に出る不安で悶々として、自分の真情を押し隠しているヘンリーとは対照的に、自分の気持ち——「皆が逃げ出したら私も逃げるだろう。その時はだれより早く逃げる。だが皆が毅然と戦うなら私も戦う。それだけは間違いない……。私は少し怖い」——を素直に吐露した人物であった。ジムは瀕死の重症を負っており、ふいに道からそれたかと思うと、丘の上まで歩いて絶命する。これを見た他の兵士はヘンリーに向かって、「大した死にざまだ。大したもんだよ。すごい気力だ。こんな男は初めてだ。本物の男だ」と称賛する。他方、一人のぼろ服の兵士から「け

がはどこだ？言えよ。どこだ」と問われると、ヘンリーは答える術を失う。そこで彼は、自分も負傷し「名誉の負傷」、すなわち「勇気の赤いバッジ」を手に入れたという願望にかられるのである。

その願望をかなえるときが偶然にやってくる。行く当てもなく森の中をさまよいついていて、ヘンリーは敗走する兵士たちの群れに出くわす。彼はそのうちの兵士を引き止めて、何が起きているのかをしつこく尋ねる。そのとき、相手は持っている銃を振り回す。それがたまたまヘンリーの後頭部を直撃して、彼は倒れ気を失ってしまう。夜になって、味方の見張りの兵士に発見されたヘンリーは自分の部隊まで連れて行ってもらい、仲間のウィルソンと再会する。陣営でヘンリーは、自分は隊からはぐれてしまい、敵に撃たれ、頭に傷を負ったのだというウソをつく。また、「逃げた」という後ろめたさから、彼は、中尉が自分の失踪について何か言っていたかをウィルソンに尋ねる。中尉が何も言っていなかったことを戦友から教えてもらい、彼はほっとする。

陣営の戦友たちがヘンリーの負傷を戦闘によるものだと思い込んでいる。しかし彼は、戦闘中に恐怖感から敵前逃亡したことや、頭の傷は敗走兵の銃でなぐられた傷であることを誰にも正直に告白できないでいる。この後に続くシーンは、周りの兵士たちや中尉が熟睡しているにもかかわらず、よく眠れずにじっと考え込んでいる彼の悩める姿である。この姿は、内面葛藤する彼を暗示する場面として印象的である。ナレーションでは、「彼は過ちを思い返していた。彼も人間だった」と説明する。この説明から判断すると、彼は自分の置かれた立場を深く熟考し、現実の人間を理解しはじめるのである。そこから浮かび上がってくるのは、彼が人的に少しずつ成長していることであろう。

2.2 2回目の交戦

一夜明けると、南軍との2回目の本格的な戦闘が行われる。ヘンリーは、まるでそれまでとは別人であるかのように、攻撃的な兵士へと変貌する。一進一退の激しい攻防の中で、彼は最前線に向かって一人で突進し発砲する。そこに、「若者は無意識に立っていた。心は憎しみだけ。敵をせん滅するという情熱にとりつかれていた。体に力がみなぎる。彼はときの声、銃弾、剣だった」というナレーションが入る。また、「バカ者。退却する相手に深追いするな、戻れ。お前のような兵ばかりなら、1週間で勝てる。大した男だよ」と中尉から評される。原作では、敵軍が一時退却し、銃声かとだえたのに気づかずに、罵声を上げながら撃ち続けるヘンリーの死に物狂いの様子が描かれている。映画では、原作と負けず劣らずに、彼の超人的な武勇が強調されている。敵軍からの降ってくる砲弾の嵐の中で、兵士たちを鼓舞する太鼓が鳴る。太鼓の音に包まれ、兵士たちは上官たちの「駆け足！前進。突撃だ！」の声に従って突進する。多くの兵士たちが銃弾に倒れ、砲弾にやられる。味方の軍旗を持った旗手が銃弾に倒れると、ヘンリーはすばやくその軍旗をつかみ、「みんな来い！この平原を渡るんだ。お前らは戦士なんだろう。来い。早く」と兵士たちを激しく鼓舞する。勇ましい音楽と共に、ヘンリーをはじめとする兵士たちの勇気ある戦いぶりが描かれている。

南軍の旗手が倒れ、先を争ってヘンリーとウィルソンはその旗を奪い合う。ついに戦いは北軍の勝利で終わる。その後ヘンリーとウィルソンはある兵士から、大佐と大尉が二人の勇敢な戦闘行為を称賛していたことを聞かされる。南軍との2回目の交戦は、原作と同じように、ヘンリーの英雄的な行為を前面に出して伝えている。彼は、軍人としてまた人間として大きく成長を遂げたと言えよう。

2.3 物語のエンディング

これまで原作との類似点に注意を払いながら、映画におけるヘンリーの言動を考察してきた。ここでは、物語のエンディングにおける彼の人的成長について検討したい。

映画では、北軍勝利の立役者として、ヘンリーとウィルソンが共に周りから称賛されるが、その後すぐにヘンリーは彼に戦場での自分のこれまでの行為について素直に告白する。ウィルソンも自分の気持ちを吐露する。次のような会話はこうした二人の姿を伝えている。

ヘンリー (H) : トム、話したいことがあるんだ。

ウィルソン (W) : 何だ？

H : 昨日戦っている最中、僕は怖くなった。

W：皆もさ。

H：だが僕は逃げてしまった。

W：本当なのか？

H：遠くにじゃない。一瞬怖くて……。決まりが悪くて、すぐ隊に戻れず、戦場の右手のほうをうろろろしていた。以上だ。すべて話したぞ。

W：話してくれてよかったよ。実はおれも皆と逃げ出したんだ。ただ大尉に捕まってね。敵より大尉が怖かった。

H：告白っていいもんだな。気持ち解放される。（下線部は筆者）

戦場で「逃げた」行為は、ヘンリーだけの特別なものではなく、どの兵士にも皆同じように、戦場で起こり得るのである。したがって、二人の会話では、この行為は決して罪とは言えないことが示唆されている。彼は頭に受けた傷についてのウソを告白せず、「すべて話したぞ」と言っている。映画では、このウソも大して重大な誤り（罪）と見なされていないように思われる。換言すれば、この種の敵前行為もウソも時には人間の成長に必要な悪であると肯定的に受け入れられていると言えよう。

ヒューストン監督の狙いは、人間的成長をしていくヘンリーの言動を観客に強く印象づけることである。そこで、ヘンリーが事の真相を戦友へ告白する場面を前にして、観客は彼に対する共感度を一気に高めるであろう。

最後のナレーションでは、本稿で引用した原作のエンディングの部分を踏まえて次のように書かれている。

流血と憤怒の地を去る時、彼の魂は変わっていた。大いなる死に触れて、死は死でしかないと知ったのだ。傷のことも忘れ——若者は自分の世界を見ていた。恐ろしい戦場は消えて——悪夢は過ぎ去った。彼は心に描いていた。静かな空や、緑の草原や、冷たい川の水を。穏やかで永遠に続く平和を。

このナレーションの後、映画は兵士たちが勇ましく行軍するシーンで完結する。このシーンは、まさに「一兵士の成功物語」として万々歳というエンディングである。映画では、ヘンリーの心象風景を表す原作の最後の一文（“Over the river a golden ray of sun came through the hosts of leaden rain clouds.”）が見られない。そこで、主人公が戦場での経験を通して人間的な成長を遂げることが、観客にとって、原作よりも理解しやすいと言える。主人公がさまざまな苦難を経験しながらも最後には名誉を勝ち取るのを知って、観客は心地よく劇場を後にするであろう。

おわりに

原作は、交戦前の不安定な心理状態から交戦後に心の平安を取り戻すヘンリーの姿を伝えている。映画は彼のこうした姿をかなり忠実に踏襲している。したがって、両者は彼の人間としての成長を、程度の差こそあれ、共通して描いていると言える。とりわけ、その共通点で驚くべきことは、現実社会では、敵前逃亡やウソ（頭の負傷を戦争の傷にすること）もこうした成長の一因となることであろう。

その一方で、原作と映画の間には、物語のエンディングにおける主人公の人間的成長の描写が異なっている。その描写の把握について、原作の読者は、穏やかな彼の心象風景から想像力をたくましくすることが求められているように思われる。同じ把握について、映画の観客は、主人公とその戦友の告白の場面が物語るように、よりはっきりと感じ取ることができるように思われる。

少なくともこれらの事柄が、クレインの原作とその映画の鑑賞から明らかになるであろう。

注

1. 本稿で言及する映画はワーナーエンターテインメントジャパン（株）ワーナー・ホーム・ビデオの『勇者の赤いバッジ』（DVD）による。ナレーションは風間綾平氏の日本語の字幕から引用している。
2. 『赤い武功章』からの引用は、Sculley Bradley, Richmond Croom Beatty, E. Hudson Long 編の

The Red Badge of Courage による。括弧内の数字は同書の頁を表す。

引用文献

- Crane, Stephen. *The Red Badge of Courage: An Authoritative Text, Backgrounds and Sources*.
Ed. Sculley Bradley, Richmond Croom Beatty, E. Hudson Long. 1962. New York: W. W.
Norton, 1976.
- … “The Veteran.” 1896. *The Red Badge of Courage: An Authoritative Text, Backgrounds and
Sources*. 177-81.
- Wyndham, George. “A Remarkable Book.” *The Red Badge of Courage: An Authoritative Text,
Backgrounds and Sources*. 181-88.
- 押谷善一郎. 『スティーヴン・クレイン——評伝と研究——』. 京都：山口書店, 1981.
- … 『スティーヴン・クレインの印象主義的技法』. 大阪：大阪教育図書, 1987.
- 『勇者の赤いバッジ』(DVD). 東京：ワーナーエンターテインメントジャパン（株）ワーナー・ホーム・ビデ
オ, 2003.